

奈良女大家政 ○植松奈美 馬場宏子 梁瀬度子 磯田憲生

目的 視環境の心理的快適性に関する研究において、評価対象は多数の刺激対象が得られやすく、且つ呈示する順序を系列的に変化させることが可能なスライド・写真・縮尺模型などが用いられているが、在室感や臨場感などが実大空間とは評価に差があるのではないかという問題が生じてくる。前報では、縮尺模型評価の位置付けを実大空間評価との比較により試みた。本研究では、更に縮尺模型評価とスライド評価との比較を、壁面家具の量及び配置について行った。

方法 評価対象は、広さ8畳の居間の10分の1縮尺模型を用いた。家具量(空間占有率)を変化要因とし、家具配置Ⅰ型の場合は4～8%、Ⅱ型・Ⅲ型の場合は5～9%でそれぞれ5段階の合計15対象として、同一対象を3回ずつ、ランダムに呈示した。評定項目は、前報の家具の量及び配置の空間効果の因子構造に基づいて、空間の快適性を価値付ける<親しみやすさ><居心地の良さ>と、活動性に関わる<豪華さ><変化に富んだ>を選んだ。物理量と心理量の対応をより明らかにするためにME法で把握し、併せて前報のSD法の結果との比較を行った。スライド評価は、上記の縮尺模型をスライド撮影し、同様に検討した。

結果 <豪華さ><変化に富んだ>については、縮尺模型とスライドの評価は共に、物理量と心理量がよく対応しており、家具量の多い時に評価が高く、<親しみやすさ><居心地の良さ>については、Ⅰ型は6～7%、Ⅲ型は7%、Ⅱ型は7～8%で評価が高かった。Ⅱ型は分散した配置のため、縮尺模型とスライドの評価では奥行感に若干の違いがみられたが、壁面家具の量及び配置の空間効果において、両対象空間でほぼ同様の結果が得られることがわかった。また、前報の縮尺模型と実大空間の評価のSD法による結果とも類似した傾向を示しており、スライド評価の妥当性が認められた。更にSD法によるスライド評価の結果との比較・検討を行った。

文献1) 植松他：室内視環境要素の心理的影響に関する実験的研究(第8報)，家政学会関西支部研，1986.11